HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	川端康成の研究 : モダニズムの方法をめぐって [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	常, 思佳
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13404号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74485
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Sijia_Chang_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　常　思佳

主査　教　授　押　野　武　志
審査委員　副査　教　授　中　村　三　春
副査　准教授　金　沢　英　之

学位論文題名
川端康成の研究――モダニズムの方法をめぐって

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の成果は、以下の二つに集約することができる。

第一に、戦前から戦後にかけての川端康成小説の方法論を、一貫したパースペクティブから記述することで、一九二〇年代に試みられた川端のモダニズムに基づく方法論が戦後まで継続していたことを明らかにした点にある。初期の西欧の前衛的な方法論を取り入れた「新感覚派」・「新心理主義」的な作品から次第に戦後に至ると日本的な美意識に基づく伝統回帰の作品へと変容したとされる川端文学の文学史的位置づけを見直し、前衛・モダニズム／伝統・日本的といった二項対立図式に基づく従来の評価を批判的に乗り越えることができた。西欧のモダニズム文学がもたらした「ポエム」「ポエジー」概念の受容の諸相を、川端の随筆から明らかにしたうえで、それを川端は、近代小説の方法論として、どのように自らの小説に内在化させたのかを考察し、戦後の長篇小説で展開される方法論と接続することに成功した。つまり、絵画・写真・映画・演劇といった小説と隣接するジャンルやメディアの特性を踏まえた川端がどのように小説の中でそれらを引用しながら、視聴覚表現の可能性を重層的に拡張したのか、あるいは、無意識も含めた錯綜した人間の内面をどのようなレトリックによって表出しようとしたのかを個々の作品に即して具体的に示すことで、川端文学におけるモダニズムの方法の連続性を究明した。

とりわけ、落葉をめぐる舞踊・絵画・音楽のイメージと小説の言語表現とが、記号化の過程をはさんでどのように結びついているのかを明らかにした第四章の「落葉」論と、和歌や手紙の様式を通して抒情と叙景が効果的に融合した心理小説として分析した第八章の『波千鳥』論は、査読付きの学会誌に掲載された論文が基になっており、学会においても既に高い評価を得ている論文である。

第二に、川端の各作品に特徴的にみられる「引用」に注目し、そうした古今東西の様々な引用元を究明し、小説生成に寄与する引用の効果を分析した点である。キユウゲルゲン『生ひ立ちの記』やジャン・コクトー『エッフェル塔の花嫁花婿』などの外国文学の原作とも比較検討しながら、引用元をどのように取り出して書き換えたのかを具体的に論証した。また、いろは歌や柿本人麻呂の和歌などの日本古典文学を引用しながら、散文化の書き換えによって、小説の新たな読解の可能性が生まれたことも明らかにした。実証的な比較文学研究に留まらずに、文学テクストだけではなく、他のジャンル（音楽・絵画・陶芸）から引用された芸術作品を小説へと変換した時に生じる、その言語表現をも究明することができた。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、上記の二つの成果に関して概ね説得的に論証されており、川端文学の全体像に迫る総合的な研究であると高く評価することができる。しかしながら、初期から後期にかけての川端文学の連続性と非連続性を記述するにあたって、「詩的精神」と「モダニズム」という分析概念があまり明瞭でないままに、それらに依拠しすぎているのではないかという疑問が呈された。前者については、それと対になる「散文精神」といった同時代言説との関係性や「エスプリ・ヌー

ボー」受容についての分析がさらに必要であること、後者に関しては、新感覚派や新心理主義の文学的特質を規定するものとして、もっと厳密な定義づけに基づく分析が必要であることなどが課題として挙げられた。また、川端の古典文芸からの引用については、これまで指摘されてこなかった典拠を明らかにするなど新見が認められるものの、その文献の解釈が不十分である点なども指摘された。戦前と戦後にわたって、川端の小説の文体と表現をめぐる連続性と変容について分析しようとする本論文の研究対象が広範囲にわたるため、十分には検討されていない他の重要な作品も多く残されている。

しかし、このような問題点は、川端文学の表現の特質を初期から後期にかけて、同時代言説や他のジャンルやメディアとの関連性も含めて多様な角度から通史的・俯瞰的に論じるという、本論文の対象領域の広さと射程の長さに由来するものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。今後、各論を積み重ねることで、それらの課題は克服され、さらなる研究成果が期待される。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。